

# 絶好の機會!

大僧正故本多親下最近の名著四種左の通り特價提供す  
吉凶共に此等の贈答は自他の法益極めて甚大ならん  
部數に限りあれば品切れとならぬ間に即時御申込あれ

- 一 法華經要義 定價 金 參 圓 送料 十 四 錢
- 一 日蓮主義心髓 定價 金壹圓八拾錢 送料 十 錢
- 一 日蓮主義精要 定價 金參圓五拾錢 送料 十 六 錢
- 一 日蓮主義本領 定價 金貳圓五拾錢 送料 十 二 錢

今月中に限り一部賣は二割引  
十部以上十九部迄二割五分引  
二十部以上四十九部迄三割引  
五十部以上九十九部迄三割五分引  
百部以上は特に破格割引 送料は實費を申受く

申込所 「教」 發行所  
東京市外南品川町妙國寺内  
振替東京一〇九四〇番

統一 定價		
一冊	一冊	一冊
金貳拾錢	金壹圓貳拾錢	金貳圓貳拾錢
送料五厘	送料共	送料共
金貳拾錢	送料共	送料共

統一 廣告料		
表紙一頁	表紙一頁	表紙一頁
金貳拾錢	金拾五錢	金九錢
金貳拾錢	金拾五錢	金九錢
金九錢	金九錢	金九錢

昭和六年八月廿四日印刷納本 (第四百三十八號)  
昭和六年九月一日發行

不許復製

編輯兼 發行所 統一行所  
編輯人 磯部滿事  
印刷人 鈴木日雄  
印刷所 東京府荏原郡品川町南品川百八十一番地  
電話高輪六〇二四番  
東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地  
振替東京五一〇七一番

# 目次

統一閣設立の趣意  
修養と信念(下)..... 聖應院日生上人  
譯意 法滅盡經..... 小笠原長生  
日生上人を憶ふ(其三)  
統一團の主義(其一)..... 故本多日生  
記 事

- 勅額拜戴と統一運動
- 野口日主上人葬儀記
- 統一團法人組織と寄附者芳名
- 聖祖御遠忌大講演會
- 統一誌と統一團及總會
- 誌料領收

第三十六年十月號



## 統一團設立の趣意を述べて

### 各派の志士に檄す

(明治二十九年十二月十五日格言事件時報所載)

附言、我統一團は抑も有名なるかの格言問題に端を發し、愛法護國の青春の血燃ゆる僧俗特に聖應院日生上人を中心として明治二十九年十二月十三日江東井生村樓に於て「統一團團結宣言大會」が開催され結成されたことは周知の事實である。

今年年を閲する三十有六、本誌の號を重ねる實に四百三十九、然るに晚近漸く其根本精神を閉却せんとする者、或は其史實に精通せざる者或は臆測を逞うする者等尠しとせざるを以て、吾曹は茲に日生上人の遺命として統一團を財團組織となすに際し、本誌當初に創設者自らの筆述に成る「統一團設立の趣意」並に「統一團の主義」を再録し、以て本團の根本精神を闡明し各位の御清覽に供する次第である。

僧徒にして道念なくば何を過かに死せざる、道念有りて一道に歸せざるあらば統一を議せずして將た何をか爲さん、佛教由來一道より無量義を開き亦結して

一實の大道を示す、聖主世尊方便涅槃の後、幾多傳法の哲匠輩出し、各一代の教判を定め教旨の精華を抜く、此に於てか各宗の別あり、末流相承け各其學ぶ所に甘んじ互に異端邪説を以て相見るに至る、無闢僧伽の實此に亡じ白法隱没の識允に當る、此時に當りて一大法將の出るなからんか佛教遂に分れて支離滅裂し、流れて汎濫散漫し、復永く其利を失せんのみ、蓋し此危害たる遠く聖鑑の中に在り、豈如来使を派して如来事を行じ以て之れが匡救を爲さしめざらんや。回顧せば、世尊出世一大事の因縁たる開權顯遠の大道を擧示するや慇勤に別命を上行薩埵に下し、知佛所説經因縁及次第隨義如實説の教勅を附與せり。是れ他なし白法隱没の時に當り滅裂せる教判に向ふて再審を下し、散漫たる教旨に對して統一を欲するの大權節刀を授け玉へるなり。

我日蓮大法將の芳躅を案するに、一面是れを見れば人なり、一面之を拜すれば人にあらず、則ち教判再審の大權を握り教旨統一の節刀を帯びて出世し玉へるなり。何を以て之を知る、曰く之を聖人の行事に徴し之を佛紀の讖言に照すに一点疑の容るべきなし、是れ所謂天晴れ地明なるもの歟。若夫れ開目抄を拜して日蓮なくば佛は妄語の人と云ふに至り、顯佛記を讀て何なる幸か生れて後五百歳に此眞文を拜見するや、在世も無益なり汝日蓮を謗せんがために佛記を虚妄にす、豈に大悪人にあらずやと云ふを見れば何人か聖人の威徳に心服せざらんや、又八幡抄の扶桑國を日本國と申す豈聖人出て給はざらんや、乃至日本の佛法と云へるを見、顯佛記の佛記に順じて之を勸るに後五百歳の始めに相當する佛法必ず東土日本より出づべきなりと云へるを拜せば、聖人は實に日本的佛教建設の大覺師なり、佛教徒たるもの安んぞ拜跪せざらんや。

大法將の出世より此に六百年、佛教未だ一道に歸せず却て賤劣の教徒にして不逞の擧に出るを見る、是れ何たる教界の變象なるぞ、聖人は嘗て再審の大權に依り、統一の節刀を振て彼等不逞の教徒を折伏し、吾曹法師に教令を下して、曰く「大陣既に破れたり餘黨は物の數ならず若黨共二陣三陣に續て迦葉阿難にも勝れ天台傳教にも越よかし」と、然れば今にして歸順せざる者は皆是れ遁竄

の敗卒のみ、一舉掃討何の難きことかこれあらんや、但恐る法將一度去て若黨共統帥を失ひ内功名を是れ争ひ外進撃の征戰を盡さず、所謂統一の三大要義を失却せり、曰く絶對の教旨、曰く折伏の元氣、曰く包含の度量是なり。若し今日我家の本領を發揮せんご欲せば内各門の志士を結托して此三大要義の回復に竭し、外不逞の教徒を叱咤し、かしこにおしかけこゝにおしよせ彼等いかに甲鐵面たりとも再び社會に立つ能はざるに至らしめ、終に權教權門の輩をして一人もなく責め落して、法王の家人ごなし一佛乘に歸せしめ、而して後止まんのみ。斯の如く内比較的に講究を遂げ、外統一の作戰を爲さんご欲せば、須らく之が方法規矩を定むべし。故に別に團則を設けて此旨義を明かにせり、請ふ道念ある僧徒は城者破城の箴言に鑑み、來て共に此大業を通達せしめよ、若夫れ道念なくんば何ぞ過かに死せざる。

### 統一團規則

#### 組織

第一條 本團體は妙宗各派の道念堅固なる僧俗を以て組織す

第二條 本團體一切の事務を統理する所を統一團本部と名く

第三條 一地方限りの事務を分掌する所を統一團支部と名く

第四條 本團體の本部は東京市淺草區新福井町三番地に置く

第五條 本團體の支部は適宜に設く

第六條 本團體は内妙宗各派の教義を比較的に講究し其旨歸を統一するを務め外權實起盡の旨義を發揮し各派の團結力を以て權教權門淫祠教徒をして再び社會に立つ能はざらしむるにあり

第七條 本團體の目的を達せん爲に左の方法を取る

- 一 比較的講究會を開き専ら教義を發揮する事
- 一 雜誌を發行して本團體の趣旨を表彰する事
- 一 演說會を設けて盛に教戰を開く事
- 一 各派共有の一大教堂を設立する事
- 一 此他實行すべき運動の方略は時々本部に於て畫策する事

第八條 本部には左の役員を置く

一 幹事若干名 幹事は本團體に關する諸般の事務を擔任す

第九條 支部毎に左の役員を置く

一 支部長一人 支部全體の事務を擔任す

一 支部副長 支部全體の事務を補翼す

入團及退團

第十條 本團體に加入せんと欲する者は本部若しくは支部の承諾を受くべし

第十一條 本團體を退かんと欲する者は其旨意を詳記し支部若しくは本部に申し出べし

第十二條 本團體加入者にして不都合の所爲ある者は幹事の決議を以て之を除名すべし

經費

第十三條 經費は各派分擔の支出及本團體賛成者の義捐金を以て支辨す

附則

此規則を改正増補するには幹事及び發起者の協議を経て之を決するものとす

以上

## 修養と信念(下)

聖應院日生上人

人間はもう少しこれを高き文明に導けば、能率も上つて来るし、幸福も増加して来る、これを少し低くしたならば、働かなくなり、文句を言ひ出し、悶えてどづき合ひを始めるのである。世の中を救ふには、人間を低下せしめたならば施すに途なく、どうすることも出来なくなつてしまふ、所謂向上の一路あるのみで、少しく或る位地より人格が向上すれば、そこに萬事は成就するのである、勝敗は人格の向上するか低下するかの一線にある。それは一軒の家庭で考へて見てもわかる、亭主なり妻君なり子供なりの人格が、或る所よりも少し低下すれば、最早やその家庭は施すに途はないのである。亭主は譯の分らぬ事を言ひ出し、妻君はヒステリーになり、息子は不良性を帯びて来る、借金は殖える……斯うなつて来ると、有ゆる方面に缺陷を生じて、家庭の平和などといふものは保つことは出来ない。それはやはり人格の缺陷である、家庭に於いても一番恐ろしいものは人格の低劣なる點に在るといふことを自覺しなければならぬ。廣く國家社會を論ずる場合も同じことである。

左様にして一切の倫理の根柢が宇宙法に接続する、絶對人格者に對する敬虔の觀念から出發するといふことは、これは間に合せの議論ではなくして、合理的な論據を有するものである。儒教にどう言つて

あるからとか、佛教に何と書いてあるからというやうな、唯だ經典上の論證ではない。それは諸君の了解を明瞭ならしむる爲に經典を引用するのであつて、人間の精神を分解し、又事實の社會といふものを研究したならば、どうしても人間の誠心を開いて人格を高めるのでなければ一切の事柄はうまくは行かない。孟子の語に「其の心に作つて其の事に害あり、其の事に作つて其の政に害あり、聖人復起るとも吾が言を易へず」といふことがある、これは實に千古の格言で、一切の根本は人間の心である、心が傷いたならば社會の状態は悪化する、さうなつては如何なる政治を執つても眼目である。政治よりも社會の事實が大切である、その事實は心より來て居るから、先づ心を善くしなければならぬ。たとへ聖人が出てこの自分の議論——心と社會の事實と政治といふもの、關係に於て、心に重きを置くといふ着想は、何人も反對することが出来ない。孟子が言つて居るのである。ところが今言ふ通り今日二十世紀の文明は、人間の心を輕んじて、さうして唯だ政治であるとか社會政策であるとかいふやうな事に依つてのみ、世の中が救はれるやうに考へて來た。それは社會の制度組織といふことも大切なことだから、改善を加へることは宜いけれども、根本はどうしても人間の心の問題に歸着するのである。

然るに徳川時代の中世から佛教の研究が岐路に驅せて、今私が語つたやうな佛教の根本の着想が儒者の間に判らなくなつて來た。私をして言はしむれば、儒者佛教の精神を知らず、僧侶佛教の精神を知らずといふことになつたのである。信仰を説けば悪人正機を語り、又修養を説けば信念の排斥を語つて遂に破佛論になるなどといふことは、誠に隣附いた人達のなしたることである。殊に儒者は天道明德の道統を輕んじて、唯だ佛教が憎い爲に、宗教の信念といふものを否定する所から、同時に儒教本來の天道を敬ふといふ心が忘れられて、仁義は説くけれども天道を説かないといふことになつて來た。

明治以後は歐米の文化を受け入れるに就いて、科學以下の文明に力を入れて、哲學とか宗教とか高遠なる文化といふものを咀嚼することが出来ない。殊に政治法制の方に偏つたからして、佛蘭西のルソーの民約論のやうな、民權自由といふやうな事のみが大變えらい事のやうに考へて來た。それは今日は詳しくは論じないけれども、私はやはり政治上に於いての一つの誤解だと思つて居る。民權自由を以つて絶対の信條のやうに今でも考へて居る人が多いが、さうではない、それが今後新らしく研究されなければならぬ大問題である。兎に角宗教のやうな側を輕んじて法制經濟の方にのみ頭腦が馳せ、又科學の文明に流れて高遠なる理想といふものを忘れたのである。

そこで修養を論じても實利主義である、所謂功利主義の道德と申して、人の心の誠といふやうなことは語らない。功利といふのは成るべく廣い範圍の利益を考へる、大勢の爲になるやうにといふことから行くと、チョットうまいやうな話だけれども、その「爲になる」といふことの考へ方が段々低くなつたからして、遂に物質だけの問題になつて來た。お彼岸に團子を拵へて配るなどといふことは何にも爲にならない、そんなことは生活改善で廣めたら宜からう……、お寺に御布施をしても何も爲にならない、

お經などを讀んだつて腹が減るばかりだ、腹減たら宜からう……斯ういふやうに何でも皆爲にならな  
い、爲にならなと言つて廢めてしまふ。さうして人間の幸福といふものを低きに置くから、そこでバ  
ンの配給とか権利の争奪といふことになつて、成るべく多數の者に權利を與へて、成るべく多數の者に  
バンの分配を公平にするといふことが一番優勢な議論のやうに考へられたのである。尤もその事だけは  
悪くはないけれども、それが人間の幸福の全部ではないのである、そんなことを言つたからといつて、  
どれほどのバンの分配が出来るかといつたら、殆ど何にもないのである、そんなことを互に議論して居  
る間に、それこそ腹が減つて来る。

此頃も總選舉などと言つて騒いで居るが、あんな事をやる爲に使ふ金でバンを買つて御覽なさい、隨  
分買へる。年中バンの問題で喧嘩しながら、少しも働かないで無駄な事をして居る、あの不經濟の状態  
といふものは、洵に議論が矛盾して居るのである。あんなことはモツと簡單にして、どこまでも人の心  
の誠を磨いて人格といふものを基にして行かなければならぬ。資本家が悪いといふのも、資本家の人格  
が悪いのである、労働者が悪いといふことも、労働者の人格が悪いのである。どちらも人格が磨かれて  
譯がわかる者にしてからでなければ話は出来ない、そこが今日の大きな問題である。例へば親類に一つ  
の問題が起つたといつても、それが非常に面倒になつて解決が附かぬかといふことは、結局双方  
の人格の問題である。その伯父さんが譯の分らぬ我儘な我儘の人である、こつちの後嗣の息子も唯だ法

律上の理窟を學んで小理窟ばかり控ねて、それで働く精神がないといふやうに、人格に於いて缺けた者  
ばかり寄り集つて居つたならば、その間に立つてどのやうな努力をしても圓滿に解決は出来ない、愈々  
法廷に立つてその利害を争ふといふやうなことになる。裁判が決定してもなかく承知しない、大審院  
へ上告までやる、それでも愈々裁判に敗けたとなつたならば、今度は火を放けるといふやうなことをや  
り出すのである。人格の缺けた者を法律や理窟で解釋するのは劣等な方法であつて、それよりも「あな  
たは伯父さんではないか」「お前は息子ではないか」と言つて、それに本當の人格と道理とを教へて、先  
づ常識の上でその事が判断し解決され、ば、その方が餘程人間として立派なことなのである。さうする  
には、さういふことの根本を成すものが宗教道徳であるから、先づ宗教を盛んにして、人々の人格を作  
ることに骨を折らなければならぬ。

然るに今日の文明はそれが缺けて參つた、そこで百弊がこれに依つて生じた譯である。人心の頹敗  
も、思想の悪化も、社會の動搖も、皆悉く人の心の誠を養はず、修養が形式に流れて信念を重んぜざ  
るの禍ひであるから、どうしてもこの一點に向つて十分に研究をしなければならぬ。日本を救ふものは  
この一つである、唯だ産業立國ナンといふことを表面から幾ら言ふても駄目である。斯ういふ人格の壞  
れた者をその儘にして置いて産業立國ナンと言つた所が、皆が寄つて蝸つて有ゆる會社といふものは喰  
物にされてしまふ。又その上に労働者も段々弱くなつて来るから、資本家の金を踏み倒すことが出来る

間は會社が續いて居るけれども、もうこれきりで後は踏み倒す金が無いといふことになつたならば、皆が争つて掠奪をするといふ時代が来るであらう。銀行でもさうである、大きな銀行が何をやつて居るか、蓋を開けたならば驚くべきものがある、今日これを防いで居るのは、取付に來たならば、大藏省でも日本銀行でも一緒になつて、甲の方で取付が始まれば乙の方の金を廻す、乙の方に取りに來れば丙の方の金を廻すといふので、辛うじてその場を糊塗して居るに過ぎない。而かもその損害を五億圓と見積つて、それは國民に負擔をさせるといふやうなことであるから、そんな方法を以つてすれば、どんな怪しい銀行と雖も彌縫することが出来る。その位金を掛ければ、泥棒も聖人にすることが出来る。そんなことを以つて彌縫して、それでどうして日本の經濟産業がうまく行つて居るなんといふことが言へるか。

それはやはりその經營に當る人の人格の問題である、彼等が算盤が下手なもので、法律を知らないのでもない、銀行の經營に従事する者の人格が缺けて居るから、爲すまじきことを爲し、引受くべからざる事を引受けた所にその缺點があるのである。何にも難かしい事はない、學問もナニも要りはない、凜然たる人格を以つて當りさへすれば、もつと早く總ての解決が附いたのである。彼等が法律を知らざる爲でもなければ、算盤を知らざる爲でもない、唯だ人格に於いて缺ける所があるが故に、斯の如き状態になるのである。

次に修養の活力が信念に依つて維持せられ、鞭撻せられるものであるといふ點を、極めて簡単に申述べて置かうと思ふ。

吾々人間は一旦修養の志を立て、その志なるものが動搖を免れないのである。それは長い間には自然に退屈を生じて來る、又時には思想が他の方に向いたり、修養を積んで行く積りではあるけれども、忘れ勝ちになつたりする。さうして又世の中には盲者が多いからして、自分が善い事をして褒めては呉れない、却つて不正な奴が成功したりして見せ付けられる、随分いやな事が澤山起つて來る。自分の美點が認められないで却つて譏誣を加へられるといふやうなことになる。「エ、馬鹿／＼しい、世の中などが當になるものが、俺は俺でやつてやれ」といふやうな不真腐れな考になつて來る。「あんな奴に馬鹿にされて堪るか、向ふが横腹を蹴るならば、こつちは首を締めてやれ」……「やるならやつて見ろ、そつちが法律で來るならば、こつちは金棒でどづいてやる」といふことになつて、今まで修養に志した人が一轉して兇暴なる精神になる。恐らくは今日の社會はさういふことが多いのではないか、「あの人は立派な人だと思つたのにあんなことをするのか、それならば吾々がやつても大丈夫だ、ヤレ／＼」といふことになつて、相率ゐて天下は惡化して行くのである。

斯ういふ世の中に處して修養の功を全うするといふことは、至難中の至難である。日蓮聖人もその事を言はれて、炎々として燃え上つて居る猛火の中に投ぜられたならば、木や石などは無論焼けてしまふ



が、鐵でも熔けてしまふ、世の中に處して人格を全うして行くといふことは、鐵の如き人でも容易ではない、それを火に熔かされないで通つて行かうといふには、餘程鍛練された日本刀のやうな鐵でない。と堪へられるものではない、故に今の世に處して過なく志を貫かうとするには、よほど警戒してかゝらなければならぬ。さうしてむやみに人の上に立つといふやうな事はよほど注意しなければならぬ、甲の座を去れといふことがあつて、一番上席に坐るといふことは考へないといけない、上席に坐れば一層敵が多くなる、陥れんとするものはぐるり八方から缺點を拾つて傷けて、さうしてその人間の心持を悪くして、「是でもか、是でもか」といふやうにやられる。それに堪へられぬ人が多からして、先づ三番目か四番目ぐらゐの所に居つて修養の效を全うしなければならぬ。さうして人間として一番情けないことは、「漕ぎこいで舟毀ち」といふことである。漕ぎこいでといふことは、海が荒れて船が難船した、漸くボートに乗つて怒濤を凌いで岸の近くまでやつて来る、漕ぎこいで腕は萎えてしまい、腹は空つて寒さに襲はれて命から／＼漸く岸の近くまで漕ぎ寄せて来た。この頃も頻りに船が難船するといふ記事が新聞に見えて居るが、あゝいふ風に船員の半は死んで、漸く少數の者がボートに乗つて海岸に近づいて来た。ヤレヤレ安心だと思つて、そこに油断をしたが爲に、海岸を去る三町か五町の所に來て暗礁に乗り上げてボートが顛覆つてしまつたならば、こんな情けないことはないではないか。お互はそのことを考へて、今日まで世の荒波を突切つて、人格の一部を兎に角維持して來たのだから、今後も暗礁に

乗り上げないやうに、もう一息といふ所でボートを毀さぬやうにしなければならぬといふことを、日蓮聖人は崇峻天皇御書といふ御遺文に懇々と書かれて居る。

左様なことを思ひ合せると、修養の功を積んで志を貫くといふことはなか／＼難いことである。魚の子は澤山生れても、龍門に登つて龍になるものは稀であるが如くに、信念を打ち立て、修養の功を全うして行くといふことはなか／＼容易なことではない。

併し先づ信念があれば、そこに修養を持続する力が現はれて来る。それは神や佛は常に我を見られて居る、照覽されて居るといふことを考へるから、それに依つて慰められ、それに依つて導かれ、その力に随つて自分の目的が達せられるといふことになるのである。即ち時々己れの信する絶對者に對して感激を持つといふことが、修養の活力を持続する所以である、そこに毎も活々とした心が續いて行くのである。

優婆塞戒經といふお經の中に、信念のない修養は彩色の繪の具の中に膠が入つて居ないやうなものだといふことが説いてある。どれほど立派な書家が花鳥や人物を描いても、その繪の具の中に膠が入つて居なかつたならば、何かチョットそれに觸れれば直ぐに剝げ落ちてしまふ。世間でいふ單なる修養といふものは、膠のない繪の具で書いた繪のやうなもので、「俺も正直にやる積りだつたけれども、對手が對手だからやめた、修養などに志したら損ばかりして居なければならぬ」……「馬鹿々々しい向ふが腹

を立て、も此方が笑つて打たれて居なければならぬ、そんなことはやめた」……「此方がこんなに親切に言ふても向ふが悪口を言ふ、その位なら横つ面を殴飛してやつた方が徳だ」……斯ういふことになつて、どうしても信念に基かない修養といふものは剝け落ちてしまふ。故に信念を基にして修養を積んで行く者にして、始めてその活力を維持することが出来るのである。

これに就いては法華經の教に依れば、信念、さうして志願力、それから善根力といふやうに、信心と、志を立てる事と、善を行ふといふことが、ズツと連結して働いて行くことを説かれて、さういふ風になつたのを法華の信者と許されて居るのである。佛に懇められる心と、それから希望に満ちたる心と、さうして善を行ふ心と、この三つの心が集つて始めて一個の信者と云へるのであると説かれて居る。

それから第三に修養の完成といふことであるが、それはどういふ有様になるのかといふと、全然宗教の信念と同じやうな心的状態になつた場合を言ふのである。修養といふものは最初は克己心なごといつて、自分の心を抑へるとか、ナニか面倒の事のやうに考へられて居るけれども、それは修養の入口に就いて言ふのであつて、修養が進んで完成して來る場合には所謂「心の欲する所に従つて炬を踏へず」と言ひ「心廣く體胖かなり」と説いて、心持が非常にのんびりして、體もゆつたりして來たやうな有様を言ふのである、即ち平和満足の状態である。孔子が朝廷の御用の無い日には家に居つてどんな有様であつたかといふと「申々始たり天々如たり」と論語にある、伸び／＼としてちやうど桃の花が咲いて居る

やうな、ニツコリして美しい状態であると申して居る。斯様な状態が修養の出來上つた状態である。ア、彼事をしなければならぬ、此事をしなければならぬといふやうな、そんな窮窮なことを考へて居る間は修養の完成とは言へない。孔子の弟子が三千人あつた、その中で一番優れて居つたのが顔回といふ人であるが、それは何故偉いかといふと、「臆を曲げて枕とす、樂み其の中に在り」といつて、冷たい疊の上にゴロンと膝を枕にして寝ても、彼れは精神の幸福を味つて居つたといふので、亞聖——聖人に亞いだ偉い人だと謂はれたのである。

さうして見ると修養の完成といふことは、その儒宗の信念と同じものである。論語の開卷第一に見ても「學んで時に之を習ふ、又説はしからずや、朋あり遠方より來る、又樂しからずや」とある、樂しからずや、説はしからずやといふことは、修養といふものが精神の愉快であることを示して居る、その儒宗の信念の法悦の有様である。今の功利主義といふやうなことや、倫理といふものが、朱子學で言ふやうな理窟ではない、人道を樂んで我が心は天が照覧になつて居る、斯ういふ考へになるのが修養の極致である。

徳川の初めに堀川の學者伊藤仁齋といふ人があつた、當時儒者の中では群を抜いて居つた、この人が當時の儒者先生を集めて談話會を開いた。皆別々になつて威張つて居つてもいかぬから、お互に集つて胸襟を披いて話さうではないかといつて、仁齋が主唱者になつて、京都の儒教の學者が皆集つて話をす

ることにした。その時に、話にかゝる前に何か唱へ言葉がなければいかぬといふので、協議をして皆の意見の一致した言著がある、それは

赫々在上

明々在下

我若私曲

天其厭我

といふことである。「赫々」といふのはお陽様が照して居るやうに上から照して居る、「明々」といふのは芝居で舞臺の前方に電燈を澤山點けて下からバツと照して居るやうな意味で、天道といふものは上からも下からもハッキリ照して居るものである。だから若し自分の心の中に或る拗けた所があつたならば、天道は見透してある、さういふ悪い考を持つて居つたならば、講釋などは幾らうまくした所が、學問の理窟を幾ら述べ立てた所が、それが何になるか。我れ若し私曲あらば天それ我を厭てん、天に厭てられれば禱る所はない、最早や學問も理窟もないものぢやといふことを、最初に皆が唱へてから話にかゝつた。ちやうど坊さんがお經を讀むやうな調子に、皆がい、聲で唱へたものであらうと思ふ、この言葉が簡單ではあるが儒教の精神を突いて居る、即ち天道明德の精神が儒教の心髓である。

であるから儒教の極致は、天に認められればそこに大なる慰安力を得て、天に愛されるれば憾みなし、天に厭てらるれば施す所なしといふことになる、それならば殆ど宗教の信念と同一のものである。

この天に認められる所の力が、世の中の煩さい事柄、或は艱難辛苦といふやうなものと戦ふ方になつて、正義を貫き艱難に耐えて行く力を産んで來るのである。日蓮聖人があの迫害多難の生涯を通じて、如何にも活々として居られた、それはその儘修養の完成して居る人であつて、信念に生きて居つた人といふことが言へるのである。日蓮聖人があの通り強い人格を現はし、正しき人格を現はし、又一面には優しき働きを現はして居るが、あのやうに至誠にして智仁勇を兼ねたる人格の完成者であつたといふことは、これが即ち信念と修養との一致した完成者である。彼は頭の座に在つて「これ程の悦びを笑へかし」と言ひ、「人打ち撲り憎むども法重ければ弘まるべし」と言つて、如何に法難迫害を以て苦しみを與へても、日蓮の教へる教が正しかつたならば抑へ切れるものではないと喝破し、又

たちわたる身のうき雲もはれぬべし

たへの御法の鷲の山風

と詠ひ、佐渡が島にあつても莞爾として、世の中に流された人は多からうが、日蓮ほど悦びに活きた者はなからうと言つて居られた。聖人はど艱難辛苦の境遇を経て、聖人の如き愉快満足の心を維持し得たことを考へると、それが修養の完成であり、又信念の力であるといふことが言へるのであつて、茲に修養の完成と信念の關係は、日蓮聖人の一代の御事蹟に於いて明瞭に示されるのである。

斯くの如く修養はその根本に於いても信念に基き、その實行に於ても信念に力づけられ、その完成に於ても信念と一致するものである。斯様に始めも中も終りも信念と離れ得ないものが正しい意味の修養

である、この事を我國民がよく會得して、修養と信念の微妙なる連結を訓練するならば、たゞこれを知るばかりでなく、その意味に於て信念を重んじ修養を積んで行くならば、その時、我が日本帝國は教はれるのである。

尙ほこの事に關して今日の教育者などは非常に研究が缺けて居る所があるやうに思ふ。それは前に申した楠公のことも、唯だ楠公の誠忠を論じて彼が天道を敬つたことを明かにしない。又藤田東湖の勤王の志は論じて、彼の正氣の歌には「天地正大の氣粹然として神州に鐘まる」と言つた、この正大の氣と言ひ、神州に鐘まるといふやうなことは、唯の道徳では説明が出来ない、どうしても宗教的思想を以て味はなければ、「秀でては富士の嶽となり、發しては萬葉の櫻となる」といふやうな、その妙味は了解されないのである。又吉田松陰先生が絶筆の場合に「至誠天地を感動せしむることが出来なかつた」と言はれた言葉、或は西郷南洲先生が「人を對手にするな、天を對手にせよ、天を對手にする人のみが立派な仕事が出来るのだ」と訓へられたやうなことも、これ等の偉人は今日の教育者も尊んで居るのであるから、その意味合が全く宗教情操であること、いふことに依つてよく味つて見たならば、修養の生命が信念にあるといふことを了解し得るのである。

何故に日本の文教に於いて、宗教の信念を斯様に忌み嫌つて居るか。それは宗教に對して不明の點もあつたが、一は基督教に對して、基督教の教へる思想が我が國體、我が國民道徳に害ありと考へて、これを防禦するが爲に、教育の上から宗教の信念を否定するやうな議論を多く吐いたのであるといふことを、私は有力な政治家から聞いて居る。明治當初の倫理政策として、さういふ手段に出るより仕方のなかつたものであるといふ告白を私は聞いた。それはその際はさうであつたかも知れぬけれども、今は基督教が怖いのではない、もつと恐るべきものがある。又基督教の中に、國民道徳に害を與へるやうなものがあるとすれば、それはやはり基督教の道徳上の觀念が十分でないのであつて、その點は基督教と雖も改め得ないことではなからうと思ふ。基督教の人も相當頑固であるし、又マゴ／＼して居る所もあるけれども、モウ少し度量を大きくして、基督教の心髓を維持するならば他のことはどうでも宜いのである、異つた國の異つた歴史の所に發達した倫理を、その儘日本に持つて來なければならぬことはない、日本に基督教を傳道せんとするには、日本の歴史的道德、國民的道德を破壊せぬやうに應用することが大切である。基督教界に人あれば、さういふ態度に出るべきであらうが、謂はゞ基督教に人なしと言つても可いのである。

基督教の是非は今しばらく別の問題としても、兎に角我が教育界に於いて、基督教の害毒を認めてこれを恐れたが爲に、一般の宗教、殊に歴史的にも密接なる關係があり、思想的にも同じ東洋思想の中に生長した儒教、佛教、神ながらの教、それ等は大切な事柄に於いて皆教育の根本と一致して居るに拘らず、表面の言葉の相違ぐらゐに眼が迷つて、今日に至るまで我國の教育界がマゴ／＼して居るといふ

ことは、餘りに不賢明なことであらうと思ふ。どうか國家の將來の爲に、一日も早く斯の如き誤解を拭ひ去つて、人間の修養を進める上にはどうしても宗教の信念の缺くべからざるものであるといふことを、政治家は勿論教育家も實業家も、國民齊しくこれを認めて、確固たる宗教の信念の上に、益々國民の修養の完成せられんことを切に望んで已まない次第である。(丁)

### 譯意 法滅盡經

子爵 小笠原 長生

#### 附記

(一日記者は井上男爵を往訪せしに四方山の清話の後、よきものあり示さんかと談話より擧げられたるものは即ち左の小笠原子爵の意譯にかゝる法滅盡經なり、一見海に現代に適切せる嚴肅たるを痛感せしかば、誌上に介し自他の道念勸發に資せんと直ちに小笠原子爵の内諾を請ひしが、子爵の謙遜なる其の譯出のあまりに不面目無作法なりして容易に許されざりしが記者は再三請ふて遂に吾人の反省を促すの明鏡となすべく肯て茲に録寫することとなしぬ)

佛滅盡と云ふと、什うやら客觀的評論のやうにも聞えるが、これから述べようとするのは決して然うしたもので無く、佛教の創立者たる釋尊御自身が、慨然として説かれた「法滅盡經」と云ふ經文の

大意なのである。

痛恨とか愾歎とかいふ位な、生優しい事では無い、「法滅盡」の名さへ自ら命ぜられたのに徴するも、この經を説かれた當時の釋尊の御胸中が察せらる。大意を碎いてお話しして見ると斯うである。

れ、苟且にも心ある佛教徒なら、涙なしに之を讀むことは出来ないであらう。

時は釋迦牟尼世尊が入滅せらるる、三月前、即ち御年齒七十九歳の暮で、拘夷那竭國に在した際である、釋尊の入滅せられた跋提河畔の娑羅双樹は同域の西北にあるので、従つてこの拘夷那竭も有名になつてゐる、——或る日例の如く大勢のお弟子達が、尊い御説法を聽聞はうと、何れも法悦に充滿て釋尊の御前に集つた、然れば適當なら、佛身より無數の光が發し、歡喜に輝いた御容貌で、直ちに説教が始まるのであるのに、此の日に限り如何にも沈んだ御様子で容易に口をお聞きにならない、のみならず光明も更に現れないから、集つた連中不審で堪らない、そこで大衆を代表してお側去らすの阿難尊者が恭しく禮を作して釋尊に對し、「從來御説法の際には、何時も御威光が顯れますのに、今日に限り其の事が御座いませぬのは什う云ふ理由で御座いませう、何卒

御意中を御聞かせ下さいませ」と三度繰返して伺つて見た、すると釋尊は、靜に打領かれて、それから愈々法滅盡の時が來ると云ふ悲惨な説法が始まつたので、その大意を碎いてお話しして見ると斯うである。

釋尊が涅槃せられて後、だん／＼末世に至ると、終に佛法が滅し盡きるとき節が參る事になる、其の前提として先づ魔道が興つて、それが次第に盛んになってくる、而うして是等魔道の奴等が、破壊の目的とする所は佛法にあるのだが、佛教徒の行爲が正しく威徳が盛んであつては、到底之を衰へさせると云ふ譯にいかないから、先づ内部より之を破つて世人の信用を失はせるやうにするのが第一だと考へる、それには魔自身が佛教徒の假面を被つて僧侶となり、色々邪惡を働けば漸次世人が愛想を盡かし、従つて佛法そのものをも嫌ふやうになるであらう、好妙／＼と魔王がニツタリ北叟笑むのを木の頭に舞臺一

轉、魔の化けた多くの僧侶が出来上つた。彼等は元々佛法を破滅させるが爲めに坊さんになつたのであるから堪つたものではない、先づ法衣の規則から亂してかゝり、抹香臭い法衣などは外出に見度もないとかながら捨て、天竺の結城づくめか、新型モーターングを着こんで、シクシクメンの香水ふんどさせ、得意を鼻の尖にぶら下げて居ると云ふ有様、それでも葬式や法事のある時は、法衣を着けない譯に參らないから、着けることは着けるが、それが又大變な騒ぎで、釋尊がお定めになつた娑婆の色——釋尊は壞色と申して、例へば鼠色や朽葉色の様な質素を通り越して殆んど不愉快な感じを起させる程の色のみをお選みになつて居るのに、魔の化坊さん達は仕うして其様ごとに服従して居るものか、紫色はござれ、緋色はござれ、錦、金襴最も妙と、華美の限りを盡したものを纏ひ、拂子一つ振るにも、俳優の所作を真似ておつう氣取るので、他を教化しようとする

る誠心誠意等樂にしたくも見當らぬ、勿論之が魔なのだから其の筈ではあるが、お酒は最好物で亂醉の上坊主頭に鉢鉢巻して、いかゞはしい踊をおごるなどは通常茶飯事で、加之に精進料理で飲めるものか、肉！肉！本味は生煮に限ると、まだ血の滴るロースか何かを頬張る形相は悪魔そのまゝで、甚だしいのは鳥や魚を手づから殺して、其の美味に舌鼓を打つただから、慈悲心の有無等、問ふ方が野暮の骨頂なのであらう。

當の佛弟子たる菩薩や羅漢方も居られて、一心不亂に徳を修めて、貧者を憐んだり、老人を念ひやつたり、厄難者を鞠育つたり、お經を聽聞し佛像を拜むことを教へたりして、諸の功德を作す、斯ういふ眞の佛弟子は志性が恩深く善良であるから、人を侵したり害ふたりしないのは云ふまでもなく、他を濟ふに當つては、自己の身を惜まない程忍辱く仁和いから、自然と人が崇んで歸依して參る、さあ斯んな人に出られては、化坊さん仲間自分達の信用が一層無くなり、其影響は米櫃にまで及ぼすのであるから、彼等に取つては一大凶愆であつて決して知らぬ顔の半兵衛を極めこんで居るわけにはいかぬ。

儲其所で可笑しいのは、魔同士である故、定めし仲が好いだらうと思ふと大違！お互に自分さへ利ければ他はどうでもよい、否他はなるべく出世させたく無いのが本音なので、相憎み相嫉み、動もすると喧嘩をする、訴訟を起す、腕力沙汰まで持上ると云ふのであるから、實以て始末に行かぬ。

惡人が他を陥れる方法は大概極つて居る、中傷譏諷、これが彼等の慣用手段である。縱し菩薩にせよ、人間に應用して生れて來られた以上、缺點探しを仕たら多少何かあるに相違ない、此所が化坊さん達の附込所で、有ること無いこと色々と嗅ぎだして針は

どのことを棒ほどに言ひふらし、彼奴はお上人顔して居るけれども、内々では這變不品行があるとか、自分の事は棚に上げて散々に惡口を吐く、所で相手の眞の佛弟子は、惡口に報ゆるに惡口を以てするやうな卑劣いことは嫌だから黙つて居る、それを好いことにして、一方は益々惡辣手段を恣にする、さあ斯うなると世間は淺はかなもので、一度が二度となり三度となるに連れて、終には眞の佛弟子の方を疑ふやうになり、夫れが募ると、彼奴のやうな墮落坊主は俺の寺には置けぬ、と可愛想に罪も無いものを追出して、其の後には化坊さんを迎へ奉つて、先祖累代の回向を頼むのであるから、誠に早やお目出度い次第である。

人間に應用して生れて來られた以上、缺點探しを仕たら多少何かあるに相違ない、此所が化坊さん達の附込所で、有ること無いこと色々と嗅ぎだして針は

儲後に直つた化坊さんは、まんまと惡計圖に當り、御前様となりすましたもの、固より佛の爲めや法の爲めと思ふなどいふ事は瓜の垢程も無いのであるから、寺院や廟所は荒れ放題、何が修理なん

かするものか、毀れようが壊れようが、我關せず焉と澄して居るのだから叶はない、尤も彼等は奸智に長けて居るから、修理を口實に檀家から淨財を募り、型ばかりの修理をして人目を瞞着し大部分は己が着服して高利の元金に充てようと、少し厚いやうな銀貨などは二枚にしようとして生爪を剥すと云ふ始末、いやはお話になつたものではない。开慶にまでして蓄財しながら、慾張根性は増長する許り、諺に言ふ痰吐同様、溜れば溜る程穢く、彼あして利げよう、斯うして殖さう、と寝言にまで言ふやうになり、自分から蓄財餓鬼の境涯に墮ち行くのである、夫れは未だしも、間が好ければ人身賣買でも行りかね無いのだから、種を植る爲に田畑を耕し厥を生ずために山を焚いたりして、其の爲めに虫けらの生命を奪ふことなどは、てんで問題にしては居らぬ程慈悲心といふものが亡失つてゐる。

這麼に迄墮落した宗教界に姪風が盛んになるのは

必然の勢であつて、此處の本文には「姪佚濁亂、男女分たす」とまで極言せられてゐる、佛道をして薄くならしめるのは皆斯う云ふ輩に由るので、天竺の風として僧侶となれば租税や賦役を免れる事が出来る、然ういふ狡い考からも僧侶になつたのであるから、元々懈怠者で、戒律は修めないし、お経も碌々讀めない、稀には讀めるものがあつても意味は少しも解らず、無我無中に鹽辛聲を張上げて如是我聞とやつてゐる。それかと云つて識者に語くではない、唯虛榮心のみ強く、信者の前を通る時など、然も殊勝氣に念珠爪繰りつゝ氣取つて歩み、容子で有難からせて供養されようと思ひのだから、何と罪深い輩ではないか、されば斯る化坊さんたちは、死後地獄に墮ち、其苦を免れて後も、永い／＼間、餓鬼道や畜生道にそれからそれと流轉し、やつと罪障が滅して出生しても、道や覺の存しない野蠻な場所であらう。

(此處で佛說法が一轉して、言が僧侶となるやうな時代の在家の事に論及せられて居る。)

佛法が減せんとする時になると、女人の方は信仰があつて恒に功德を作すのに、男子は心懈つて佛法を慢り、僧侶を全るで糞土か何かのやうに視て信心等少しもない。

如く、之に對して善者は甚だ少く、僅かに一二二人といふ程の比較を示すのである。今や世界は滅亡に瀕して居て人の壽命も短くなり、それでも女子には長壽するものもあるが、男子は四十歳で頭白くなり、極く長年と云うても六十歳が限度である、然うして大水が不意に起つたりして、貴踐の別なく没溺するであらう。

出家も在家も這麼な有様であるから、諸天善神は涙を流して泣き、洪水はある、早暈は續く、五穀は熟さない、疫病は流行する、死亡者は衆くなる、といふやうに天災地妖頻發して、人民の苦惱は筆にも舌にも盡せない程である。信仰の無くなつた社會程恐ろしいものは無い、人心は悪化の仕放題で、奸邪の限りを盡し、非道な者程勢力があるやうになると、善政の敷かれる筈がない、官吏は官憲を笠に着て人民を虐げ、道理などは全然無視して亂棒を樂しむのである、斯くも朝野を擧げて混亂状態に陥つては、自然の結果として悪人の多いことは海中の沙の

此の時に菩薩や羅漢のやうな聖賢もあることはあるが、何分にも衆魔が充滿して居て其の勢力の方が強盛だから、其爲に是等聖賢は逐ひ拂はれて、遂に世を見限り、山中安らかな場所に隱遁し、獨り靜かに道を守つて忻快とするのである、斯う云ふ聖賢は諸天善神が護つて呉れるから、何等の危険もなく、壽命も延長して、其の際佛法名殘の光明として世に出て来る月光菩薩と共に、一旦は多少佛法を回復するが、決して永續はしないで法滅盡の時となるので、此の先きは最早説くに忍びないのである。

(此處で一轉し、法滅盡の後數千萬歳を経て彌勒が世に出で、佛法が更に起る事を説かれてゐるが、それは略する。)

以上を謹聴してゐた阿難尊者は、謹みて釋尊に對し、此のお經を何と名けて奉持致しませうかとお伺ひした、すると佛は阿難に向はれて、「法滅盡」と名けよ、と仰せになつたもので、出家の僧侶在家のお弟子達は、孰れも悲しみ恨んだとある。

此の御説法にある魔が僧侶になつて佛道を壞亂するとは、正しく天竺に於ける佛法滅盡の状況を述べ

られたものと解したい。然れば各宗何れも高僧碩徳雲の如くに集まれる我が國の佛敎界から觀られたら、寧ろ噴飯に堪えられぬ位のものであるかも知れぬが、全然之を對岸の火災視しておいてよいであらうか、可ければ誠に頂上で佛敎の爲め慶賀に堪えぬ次第である、何れにしても、私は二千五百年の昔時に於ける佛陀の此の御豫言に對し、滿腔の敬意を表するものである。

# 日生上人を憶ふ

(其三)

木村日保

## 宮谷壇林の教育振り

本多上人宗門復歸後間もなく即ち明治二十八年の

暮に學林長となつて宮谷に多くの生徒と起臥を俱にし、教鞭を執つて居られた時のことで、自分が信仰

を啓發せられたのは實に此の二十九年の半歳であつた。日生上人當時の檀林に於ける講義振りは極めて謹嚴莊重なものであつた。謂ふ迄もないことではあるが、その時分の講座は一段高くしつらえられてゐて、學生は皆袈裟をチャンと纏ひ、恰度今日の法要の際に於ける中座のやうな位置に相對してズラーツとお經儿に向つて並座して居たものである。そうすると本多上人は紫の法衣を纏はれ兩手に恭しく一巻の撰法華經を捧持されつゝ、少しく伏目になつて肅々静々とスリ足で出座され、先づ第一に御寶前に慇懃鄭重な長跪禮拜を行はれた後、徐ろに衣の袖から撰法華經を几上に安置され、而して順次講義が始まるのであるが、其の間の光景は實に何ともいへない森嚴さに如何なる無道念の者でも胸撃れる。日生上人の身邊からは五色の御光が輝いて居るやうに、會下の一座は恰かも靈山に往詣して釋迦牟尼佛より聽法して居るやうな雰圍氣におかれて居た、随つて説く方も聽く方も同一體のやうになるから、これで菩提心の啓發されざる譯はない。今から當時を追憶して無上に慕はしくなるのは敢て自分のみではあるま

い。

## 雜司ヶ谷學林に於ける化導

明治三十八年春三月雜司ヶ谷へ學林が新築され、本多上人は大僧正小林日至上人と俱に教鞭を執られて居た時にも實に師範としての美談がある。神戸の熊井本光師は其時分は未だ學生で、よく日生上人のお食事の給仕をしたものであつた。齋時分となつて熊井師が膳部を運んで來ても、日生上人はいつも端然として机上に書見されてゐるといふよりは寧ろ書中の人となられて居た。「お食事が出来ました」と遠慮しつゝ申上ぐると、上人は「そうか」とお返辭はあつた。直ぐに膳には向はれない。味噌汁に澤庵の粗末な學生も同様な献立に、冷ては不味からうと二三度申上ぐると漸くお氣付かれたやうに「ウムツ」と仰せられて直ちに箸をお採りになるが、それでも御精神は机上から眼は書物から離れないのみならず、時々食事の中途にも急に箸を捨てて机に向はれること屢々であつた。何といふ御熱心さであらう、人か書か、此の至誠に依つてこそかの大成はあるものと首肯するであらう。そればかりでなく住職寺の妙國寺に



は四ヶ月もお歸寺にならず學林に一貫起臥されつゝ、子弟の教養に熱中されたことは餘人の眞似がた

い所であらう、今憶ひ出しても實に有がたく尊く感ずる。

### 強記日董大僧正を驚かす

(本多日生師の逸話の三)

松尾清明

一日本多日生師、日蓮宗有名の碩學、小林日董上人に面接す、話は時の問題たる綱要格言問題に入る。

小林「自體綱要にはどういふ工合に四箇格言を書入れましたか」

本多

「それでは本文を素讀しませうか」

小林

「どうぞ」

本多

「此四箇の格言は聖日蓮が本佛釋尊より委托せられたる佛教統一の大任を果す爲めに大聲叱呼せし所にして實に本宗の性格中萬古一貫の妙義なり……」

### ◎統一團の主義

(明治三十年一月二十日發兌 統一誌第二號所載)

本多日生師演說  
速記法研究會員速記

私は統一團の主義と云ふ事を御話する考へてございます。統一團は四箇格言問題の爲に熱中致しましたる日蓮宗の僧侶信徒より成立つたものでございませう、其目的は佛教を統一して日本の大多數の勢力ある宗教と致しまして他日世界の宗教の競争に於て日本が最後の勝を占め様と云ふ最も豁大なる希望を以て生れたものであります、夫で四箇格言と云ひます

れば僅かに佛教の解釋を誤つたる四箇の宗旨を攻撃したる議論に過ぎない様でございますが、日蓮上人の此の御議論を御主張なさるといふものは他の親鸞と云ひ弘法と云ひ是等の佛教徒が佛教の解釋を誤つた、其の誤つた意見を攻撃する小さな考ではない、

全く此國家を思ひ衆生を救はうといふ大慈悲心より現はれ來つた議論であるから四箇の格言は初めから極まつて居る。

日蓮上人の唱道した四箇格言も本多日生師が受繼いで主張する四箇格言も違つて居りませぬ。一々日蓮上人の御書判を以て立證させよう、夫が疑はしいなら誰でも出て御いでなさい我々は無責任の議論は吐かない、夫で四箇の格言は何故愛國の議論であるか一切衆生を救ふの議論であるかと云ふ事は仔細に研究しなければならぬ、今更で他宗の人々が四箇格言は罵詈雑言である、日蓮一個の私言であると云ふのは是は全く此四箇格言と云ふものを研究しな

い言葉である、日蓮上人の四箇格言はどの邊が不  
理である。どの邊が佛教解釋の意見が間違つて居る  
と云ふ事をば立派に證明をしなければならぬ。

近頃小栗栖香頂といふ眞宗の一等教師である宗教  
學としては眞宗に於て第一流の人であるけれ共其人  
が『是眞宗』と云ふ雜誌の上に公にした意見即ち存  
覺と云ふ人が著はした『法華問答』といふ書に據つ  
て釋尊の出世本懐即ち御迦迦様が此世に御生れに  
なつた眞實義といふものはこゝにあるといふことを  
説いた御經が幾つもあるといふ議論を以て法華經の  
みが出世本懐の御經で無いと云ふ事をば論じて居  
る、さうして法華經の地位は今日の所でも手が届か  
ない阿彌陀の方は低いけれ共今日の劣つた人を救ふ  
事が出来る、所謂時機適合の法である、と、此の如  
き議論を以て間違ない佛教の解釋と思ふて憚らさ  
う云ふ事を天下に公にして居る、是が如何に愚かな  
議論であるか、佛教の學問上から言つたならばどれ

程大人氣ない議論であるかと云ふ事は少しく佛教を  
研究したならば直き分る事である、能く考へなけれ  
ばなりませぬ。釋迦如來の出世本懐は、色々の法門  
を以て御經を説いたけれ共、是が佛教の眞實義であ  
る、十方法界に亘つて三世に貫き動かない眞理であ  
ると云つて滿腔の赤誠を表はしてある御經がいくつ  
もある杯と云ふことは實に愚論にして辯駁を加へず  
して分つて居るでは無いか、何です阿彌陀といふも  
のは……先づ私がかゝるに質問を設けて置く、眞宗  
何萬の僧侶が研究しても之に答ふるに頑固暴力を以  
てするの外どうしても正當に答辯の出来ない説明さ  
れない疑問を立派に提供して置く(謹誌)

阿彌陀經といふ御經は舍利弗の爲に説いたが其の  
舍利弗が阿彌陀經に依つて教はれて居らぬぢやない  
か、三部經といふものは末法の者を救ふと云ふけれ  
共其の教説の上に於て是は正法千年經つて像法の場  
合も千年以前に利益滅盡して居る事は立派に同本異

譯の平等覺經に於て證明せられて居る(ヒヤ)立  
派に年期が來て樂の効能は今より千餘年前に無く無  
つて仕舞つて樂の味も無ければ匂ひも無くなつて仕  
舞つた、釋迦如來自ら年限を指して三部經の利益滅  
盡を證せられて居る、又之を道理の上から研究しま  
すれば原因結果の關係といふものは宇宙の眞理であ  
る、哲學の原則である、佛教の原則である、原因結  
果の法則に外れたもの之を非眞理と申しませう、阿  
彌陀といふものは何に依つて佛になつたのである  
か、夫は基督教に於て神の原因を説きせないで初か  
ら全智全能の神があつて天地を造り人類を救ふとい  
ふやうな非論理な宗教と同一なものである、(ヒヤ  
ノウ)四十八願を説いたと言つた所が之を  
概括すれば則ち多くの衆生を救ふと云ふ自分の希望  
を述べたに止まつて居る、彌陀が何に依つて悟を開  
いたか、どういふ譯で彌陀といふ佛が生れるかとい  
ふ原因を討究して見ると漠として答が出来ぬであら

うと思ふ、其初め法藏比丘といふ一個の坊主だ、法藏  
比丘といふ一個の坊さんが阿彌陀佛といふ佛に生れ  
變るに附いてはどうして爲つたのであるかといふ原  
因を討究し來るといふと即ち此の妙法蓮華經に依ら  
なければならぬ、乃ち古來眞宗の者が排斥して居る  
所の妙法蓮華經に依らなければ阿彌陀といふ佛は出  
來ない、此議論が破れぬ限りには眞宗の根本此の眞  
宗の教理といふものを破る位なことは日蓮の議論で  
はないけれど試みに眞宗で言つて居る所の彼の小栗  
栖香頂とか何とかいふ者が天下に知られて居る者が  
言ふやうな議論は我々青二才の議論にも叶はぬから  
以て眞宗全體教義の根柢が低いといふことを天下に  
示すに足る譯で、すれば其の阿彌陀といふ佛さんが  
ビヨツと出來たと思つて居るが眞宗の何百萬といふ所  
の迷へる信徒であります。何です阿彌陀といふ佛は  
必ず此妙法蓮華經の一念三千の法に依らねば出來  
ぬ、それ丈の原因なしに偶然と阿彌陀佛といふ佛が

出来たといふ事は佛教の大原則に背き、宇宙の大原理に背くものである。(偶然と出来たりとは何れに在りや)其阿彌陀佛といふ佛が出来、其佛様が救ひ取る所が淨土といふものである、それを哲學的に研究したならば其淨土といふものは初より存在をしたものであるか今日も現に存在し居るものであるかといふことを研究すると彼の安養淨土といふものは彌陀が正覺を成じ即ち佛に成つた時分に己が願力を以て造り出したといふ、さうすると自分が佛に成る所の希望と精神とに依つて世界が出来上るといふ話、丁度神様が何にも無い所で世界を拵へて見やうと思ふ様な耶蘇教の説も同じだ、彼の三部經の安養淨土の成立ちも毫も違はぬ、それで阿彌陀様といふ佛が出来て淨土を一つ建立しやう、彌陀の願力より建立せられた淨土であるから、是は日蓮上人の御議論であるが日蓮上人の御議論は動かない、其阿彌陀といふ佛が出来なければ安養淨土はない、阿彌陀といふ佛

が涅槃に入れば安養淨土は壞れる、所が阿彌陀如来といふ佛様が御釋迦様の大慈悲身の形を變へて現はれた所より法華經に來ると阿彌陀如来は釋迦如来の分身といふことになつて居る、それで……(喧囂にして聴取されず)……それは佛教を學んで其位のことを知らなければもう坊主をやめて仕舞ふが宜い(ヒヤ)それで阿彌陀といふ佛様と御釋迦様が法華經に來つてそんなに安養淨土といふやうな方へ行かなくてもよいといふ事を説いて居る、眞宗の坊さんなどは學問が淺いから分らぬ、分らぬといふのは何だ、親鸞の著した『教行信證』の中に偶然と阿彌陀が現はれは極樂國土を築いたやうにあるがそれは分らぬ、其の點に附いて研究して分る人は餘りなからう、あるなら此處へ出て御いでなさい、それを解釋するといふと阿彌陀様の佛體といふものは唯心の佛體であるとか、修道の業身であるとかいふやうな議論の上から眞宗が勤めて居る、何でも分らぬか

ら難有がつて安養淨土に行くといふ其行く世界が壞はれて仕舞へば便りにする阿彌陀様が夢の様に消へる、さうなつて見ると大勢の者が何處へ行くか、行く世界が消へて仕舞ふ、斯う云ふ何も無いものを目的に信仰して多くの時間を費やし多くの金を抱たして居ると云ふのは國の爲に多くの人の爲に氣の毒と言はねばならぬ。

また、幾らもある、又彼念佛門の教理は龍樹菩薩の毘婆沙論に據つて來たものである、毘婆沙論から難行易行と云ふ事は來たが此の法華經は難行道である我々の修行する事が出来ないものであるといふことを論旨とした、此據所になつて居る毘婆沙論といふものは何を講釋したものか、華嚴經の十地品を講釋して僅かに第二地まで解釋したが跡は端本になつて居るものである龍樹菩薩の意見を見るならば大智度論を見るならば完全したもので大乘佛教の全體に附いての意見である、通俗的の佛教に依らねばな

らぬ即ち毘婆沙論に易行品といふ一部分の解釋が出来た、夫で難行といふものは聲聞緣覺と云ふ二乘といふものに墮込んだならば之を菩薩の師と名ける程の者でも浮び上る事は出来ぬ、聲聞緣覺と云ふものに墮込んだならば何時まで立つても浮ぶことは出来ないからさう云ふ者の爲に今假りの方便に易行品を聞くと云ふて念佛法といふものを説いた夫は十方三世の諸佛を念すると云ふ事になつて居る、阿彌陀一佛ちや無い、念佛と云ふと佛を念するといふことで範圍が廣いからそこで即ち難行道と云ふ中へ法華經が這入つて居らないものをば法華經を入れて矢張り難行道と稱するのは是は牽強附會、即ち親鸞なり法然なりが龍樹菩薩の意見を取違へて居ることは何時までたつても變らぬ議論だ、私の議論は眞宗を攻撃するのであるけれ共今の小栗栖香頂といふ人と何も喧嘩をするには及びませぬ、眞宗はさふ云ふ譯で教義の上に於ては最も薄彌で佛様の眞意にも叶はねば

宇宙の道理にも叶はないものであると思ひますからしてさう云ふものを以て多くの人民を信仰させて居る時に於ては(罵詈を止めよ)全く是は罵詈ではありませぬ、是が罵詈を云へば凡そ宗教の議論は出来ませぬ。(以下次號)

## 記事

### 勅額拜戴と統一運動

本日十月一日畏くも『立正』の勅額恩賜の御沙汰を拜し、十年前本多日生上人が、立正大師證號奏請に就て門下九教團を動かせ、外に世間に於ける當代知名の崇敬者十餘名の連署を以て請願された事は未だ吾人の記憶の新なる所である、随つて今回の勅筆を拜するにつけてもア、日生上人在せば! の感が眞先に湧く!!

大正十一年十月十三日、日生上人が、各教團代表中

遊ばした事であらう、日蓮門下なるものは此旨を體し各派は融合統一の下に道俗は水魚の思で、時代對應して専ら立正安國の理想實現に努力して居るものと畏くも御信賴遊ばして居るに相違ない、されば今回の『立正』の鳳文も龍顔麗はしく天筆をお染め遊ばした事と遙かに拜察申上ぐる者である。

嗚呼一度想をこゝに至す時に吾人は辣然として肌粟粒を生ずる。我に僞瞞不遜の生活なきや否、我に反師逆闕の日常なきや否、我に頑迷排他の妄執なきや否、我に正信正解ありや否、我れ時代適應の運用果して如何等。曩には畏くも國民善導が宗教信念よりと御軫念遊ばされた、而も廣宣流布の最要は聖訓の色讀にある。如説の修行とは師に事ふるより大なるはない『實に佛に成るの道は師に事ふるに過ぎず』若し弟子あつて師の過を見れば若は實にもあれ若は不實にもあれ其心自ら法の勝利を壞失す』釋尊の千載給仕、宗祖の延山供養、明師の隨身一貫寔に芳躅千古に郁々として一つも惑ふ所はない、師匠は骨になつた、墓碑がもの云ふかとは何たる戯論ぞ、斷じて許すべからず!

の代表として牧野宮内大臣に面接された時に、宮内大臣はこの大師號を追賜せられた御思召を物語られた要點は『日本ノ現狀思想界ノ此狀態ニ對シテドウシテモ是レハ健實ナ思想殊ニ鞏固ナル宗教ノ信念カラ國民ヲ善導シナケレバナラス』といふことが、攝政宮殿下の思召であるとのお話であつた。之を傳達された各派管長には非常に感憤された、その緊張した気分は遂に自宗内に同日を以て同一の訓示を布達しやうとの統一運動であつた、しかも其の訓示は攝政宮殿下の台覽に供されたそうである。該訓示は當時の統一誌上にも掲出されて居るから御清覽願ひたい、その特に大切の點は『立正大師ノ遺教ヲ發揚シ以テ立正安國ノ實現ヲ期シ進ンデ理想的文化ノ建設ニ寄與セントスルニハ先ヅ各派ノ融合ヲ念トシ僧俗ノ異體同心ヲ重ンジ、清新ナル時代適應ノ教化ヲ盛ニシ此好機ヲ一轉期トシテ舊來ノ陋習ヲ脱却セズンバアラズ』——此時一大覺醒ノ下ニ其組織ヲ考慮シ其運用ヲ敏活ニシ其活動ヲ旺盛ニシ其宣傳ヲ適切ニシ以テ此機ヲ善用セズンバアラズ』等 此等の同一訓示を御覽遊ばした昭和の 聖上陛下は悉く御嘉納

吾人は佛性あり、日蓮魂、此際此千載一遇の大佳會に洗然として宿障を拂拭し、先づ學宗 聖應院日生上人の御靈前に來れ! 而して立正大師に叩き、壽量釋尊に長跪合掌して至心に大懺悔せよ、更に進んで大局に着眼し以て知法思國、立正安國の理想實現に邁進すべく眞の統一運動に出で、以て聖恩報答致したいものである。

### 聖祖御遠忌大講演會

大聖人の御遠忌が各地に於て營まれて居たが帝都に於ては未だ此の催しが無い、且つ又聖應院日生上人の報恩追悼會も行はれず、何としても淋しい、涙ぐましい事である。吾人は徒らに誰れかやるだらう、何とかなるだらう位のことでは放任は出来ない。九月十五日は日生上人御遷化後早くも半歳を経過せる御遠夜に相當する、此の記念の日に統一團が主催となつて、大聖人御遠忌第一回大講演會を舉行し、聖恩報答法統宣揚の一端に致し度と健氣にも發願された。

統一閣を會場とすることが當然の順序であるにも拘らず、不思議なる哉、堂住職は有無を論せず理由なしに言下に使用お断りと出た、吾等奇怪千萬とは思つたが兎角の論議は避けて、本郷の帝大佛教青年會館を之に充てて定刻正六時に於て、和賀義見師の開會の辭に始まり、山口智光師の十分講話あつて後、六時三十分より井上清純男の『自界反逆難』と題せる適切な講演が一時間に及び、續々として詰かけた四百の聴衆は滿面緊張に溢ざり、やがて大拍手裡に降壇され、續いて小林一郎氏の『王法と佛法』の題下に自在無礙辯で來聽を自由に扱はれつゝ、深き印象を與へられ、定刻来るや、雷の如き急激を殘して降壇された。直ちに磯部滿事氏の閉會の辭に終り、一同は輝ける歡悅の面持ちに充されて、この記念の講演會場を家路へと迎られた。この尖端を切つた本國の美譽に刺激され、今後は隨所に此種の布教宣傳の施行されん事を切望する。

### 野口日主上人葬儀記

世界巡錫歸朝後、病臥八十日、衆望遂に叶はず、

梅曉氏、内田良平氏、インド志士ラス、ビハリ、ボース氏、姉崎博士、本因坊秀哉氏、丸山鶴吉氏夫人、頭山滿翁は此の日箱根に病氣靜養中の爲、代理并に令息頭山秀三氏、日蓮宗代表として柴田一能師、加藤文雄師、國柱會代表高知尾誠吉氏、京都信徒代表、國光婦人會代表、正行院婦人會代表、千葉縣大網野田、等其の他各地方信徒代表、在京知友信徒并に大乘會、佛教聯合會關係の各宗僧員等、八百餘名。

式は管長井村日成親下大導師の下に惣本山代表等僧員等四十餘名に依りいと莊嚴に奉行され勸請、諷經、散華に次いで管長親下は左の歎徳文を朗讀

啓上 歎徳文

南無本門壽量本尊當任之三寶尊護法護國之諸天善神宗祖南無日蓮大聖人國祖南無日什大正師等來臨影護知見照覽アラセ給へ夫レ以レハ壽量顯本ノ歎風ハ常樂我淨ノ妙語ヲ奏シ實在不滅ノ慈光ハ度生普濟ノ力用ヲ顯ヘス偉哉大道體現ノ大刹妙益得テ測ル可カラス  
雖然生住異滅生老病死ハ變遷人界ノ旋 誰カ是ヲ免レン、十力圓滿之佛陀八相成道ノ行儀ヲ示シテ假ニ涅槃ノ雲ニ隱レ給フ  
干茲 本日本葬之儀式ヲ行フ惣本山妙滿寺第二百六十九世權大僧

去る七月二十六日午前二時四十分、泰然、薰化を他郷に遷し給ひし、事智悲院野口日主上人儀、越へて二十八日午前九時、自坊淺草妙經寺に於て、道友今成日誓師導師の下に惣本山代表、其の他關西、千葉より上京の僧侶、東京寺院住職等に依り嚴肅なる茶毘式修行、會する者、頭山滿翁、本因坊秀哉氏、佐藤中將、中野正剛氏、岩野少將、矢野茂氏、田中舍身氏夫人等知名篤信の士多數、式終つて直ちに茶毘に付された、其の後忌日々々の法會も在京僧俗、又は上京の地方僧俗等により嚴修。

本葬儀は去る八月二十九日（五七日忌相當）午後二時より淺草統一閣に於て虔修された、尙其の前夜集まれる僧俗に依り通夜が務められ、當二十九日午前五時、遺弟及び檀信徒に依り移靈式が行はれた。當日は前日の炎暑に引き換へて殘暑に稀な涼しい穏やかな天氣でそらる上人の風格の偲ばるゝものあり、此の日前首相濱口雄幸氏葬儀當日なりし爲知名の士參列少かりしも會する者。

佐藤中將、岩野少將、矢野茂氏、高橋義章中將、本彫家山本瑞雲氏、佐々木照山氏、支那時報社水野

正事智悲院日主上人モ先般ニ願ヒ行年六十六歳ヲ人生ノ一期トシテ歿山淨土ヘ往詣シ給フ  
舊々上人一期ノ行狀ヲ案スルニ

慶應二年十二月二十四日千葉縣長生郡關村福島野口家ニ五々ノ聲ヲ揚ゲ 實性温厚ニシテ衆人愛敬ノ徳ヲ備ヘ學藝ニ造詣深ク筆道ニ堪能ナリ 同縣山武郡増穂村横川芳墳寺住職小高慈演師ニ就テ得度シ明治十三年二月二十八日度牒ヲ拜受ス 明治十六年十月二十日教導職試補ニ補セラレ本宗大學林又ハ哲學館ニ學ブ 累進大正四年七月三十一日權大僧正ニ叙セラレ大正十五年四月十一日多年ノ功勞ヲ表彰セラレ總本山第二百六十九世ノ眞首ニ列セラレタリ

明治十八年三月十三日千葉縣増穂村三光寺ニ住職シ同縣二ノ宮本郷村本源寺東京赤坂常玄寺京都正行院千葉縣大網町通照寺東京淺草妙經寺住職ニ歷任シ又京都市寂光寺ヲ兼職シタリ  
明治廿四年十二月十六日 大學林教授ニ任セラレ明治廿六年八月二日評議員ニ當選シ明治三十三年四月二十四日日本山部長ニ任セラレ明治四十二年六月二十七日宗務總監ニ榮轉シ監督布教師ヲ兼職シ大正七年五月八日評議員ニ再選シ大正十一年八月十七日宗會議員ニ當選シタル等多年宗門ニ盡瘁シタル功績稱計スヘカラス  
上人清廉ニシテ儀容格ラス小心ニシテ放蕩 蓋落ニシテ學實蓋シ義禪ノ名ニ背カス 上人少時ヨリ福道光顯ノ爲ニ受難ヲ體驗シ海外宣教ヲ敢行シ骨ヲ異郷ニ埋メタル日持上人ノ莊嚴ヲ慕フ 明治廿七年五月七日各地布教諸宗敬視察ノ命ヲ受ケ足跡薩南ノ地ニ及フ 之レ上人宿願達成ノ權稱ニシテ後年尼港ニ於ケル同胞虐殺

ノ性事ニ際シテハ單身彼地ニ到リ慰安ノ道ヲ講シ、豫テ日持上人ノ遺跡ヲ尋ネ前夜二回朝鮮滿洲支那等ヲ巡遊シ大正十二年ニハ北海道ヲ行化ス。

上人決スル處アリ、今ニシテ宿願ヲ果サシムレバ、類給其時機ヲ失フノ悔アラント同志ノ贊助ヲ得テ世界巡錫印度佛蹟參拜ノ壯圖ヲ成辦セントシ昭和四年六月二十一日帝都ヲ發シテ一路布哇ニ到リ爾來北米著名ノ都市ヲ歴遊シテ大ニ佛蹟ヲ傳揚シ更ニ歐洲ニ轉航シ、英吉利、佛蘭西、獨逸、伊太利、和蘭、瑞西等ノ主要都市ヲ遍歴シテ大乘佛教ノ真義ヲ宣傳シ逆路印度ニ到リ錫倫、加耶、恒河、祇園、王舍城等、善タ佛陀大聖ノ遺蹟ヲ訪尋シ靈鷲山ニ登リ、師經唱題佛恩ヲ慕謝シ奉リ感慨無量低回去ルニ忍ビズ、冥想時ヲ移ス、又爪哇ノ佛壇ニ參拜シ轉航シテ英領シンガポールニ化ヲ布ク、時ニ本多大僧正ノ計報ヲ受ケ其本葬式ニ參列セシガ爲ニ旅程ヲ變更シテ本年五月六日歸京セラレタリ。

上人臨中病ニ罹ル二回、幸ニ小康ヲ得テ宿望成就シタルガ歸來病大ニ革マリ上人又起テサルヲ覺悟ス、井村、今成、山根ノ三者宿ニ宿願成滿ノ報恩塔ヲ總本山ノ境域ニ建設スルコトヲ依頼シ七月廿三日多數ノ僧俗ト訣別ノ會ヲ遂テ七月廿六日安祥トシテ得涅槃樂ノ境地ニ入り給フ。

嗚呼、上人ノ如キハ眞ニ是レ佛子ノ範ヲ示シタルモノニシテ其ノ増進損生位隣大覺ハ生前ノ總行之ヲ證シテ餘アリ。經曰、日月ノ光明ノ能ク諸ノ幽冥ヲ除クガ如ク斯ノ人世間ニ行ジテ能ク衆生ノ闇ヲ滅シ無量ノ苦難ヲシテ畢竟シテ一乘ニ住セシムト、仍前數語文如是

應氏、本山信徒代表、犬養毅氏、日蓮教壇、四恩教林、本佛教會、妙經寺惣代、永住町町會、加瀬倭武少將、高島平三郎氏、中外日報社、床次竹二郎氏、境野黃洋氏、細野辰雄少將、山岸綜貫氏、川島浪花氏

弔電は

朝鮮天晴地明會、宇都宮日蓮主義安國會、田中弘之氏、堀内中將、身延山貫主岡田教篤現下、比叡山壬生雄舜師、本門宗宗務院佛敎聯合會、小川運平氏、高松立正社黒澤松南氏、等百九十六通  
因みに、病臥止む無く血涙の弔文を寄せられし山岸綜貫師は北越長岡に於ける眞宗僧侶にして日主上人巡錫毎に自坊に日蓮主義講演會を開きし奇傑、又以て故上人の風格を偲び得。(狂子章記)

### 廻想故野口上人世界漫遊

松尾 清明

廻旋萬里遠 奔走志勞疲  
本是天涯枕 孤怨北風吹

昭和六年八月二十九日

顯本法華宗管長大僧正 日 成 敬白

四〇

一言一句滿堂四衆の間を縫ふて上人生前を偲ぶの情、今更に涙新たに、大衆寂として聲無し。次いで四恩教林代表岩野少將、本山信徒代表等の弔辭、堀内信水中將、田中舍身居士等よりの弔電朗讀し、遺弟、遺族一般大衆の焼香に移る、香煙ゆるやかに場内を漂ふ中に自我偈讀題目唱和、儀式、莊嚴裡に終了す。終つて今成葬儀委員長立ちちて參列の大衆に御禮挨拶し、故日主上人最後の言葉に言及して『日主上人命旦夕に迫りし時 予枕頭に侍して

「何か云ひ遺す事何きや」

と問ひしに、上人言下に曰く

「無し、唯、廣宜流布の一事のみ」

と。以て上人の眞面目を知るに足る」

と結ぶや、滿堂寂として微動だに無く、病軀遂に起つ能はざるを覺りしも廣布の祖願に燃ゆる上人沖天の意氣に想到して大衆肅然たり、當日弔辭、弔電大略左の如し。

石井菊次郎子爵、大迫尙道大將、國柱會山川智

### 統一誌と統一團及總會

本誌巻頭「統一團設立の趣意」と別掲團規第七條に明示された通り、統一誌の歴史は統一團とは不離の關係にあるといふことは申す迄もない事實である。

去月九日宗門有數の兩者宿、態々本誌のことに關して個人的に來訪下さつた。それは今度どうした事が宗門から統一主義といふものを發行するそうである。それでは却て不統一であるから、本誌一つに纏め宗門と共輯にしてはどうかとの御内談であつた。無論異議のあるべき筈はないのみならず、吾人と宗門と二元的に見られることさへ不思議に思ふ、ドシ／＼宗門は本誌を活用して可なりである。又さう出て頂きたい。然るに僅かの補助金さへ宗會に上程せずして俄然停止する如き直接行動に出た今日、宗門としては嗚御都合のお悪いこととお察しする、勢ひ愛宗護法の兩師は、此際圓滿なる協調に據り度いどの思召は、涙のこぼるゝ程嬉しい、此涙は敢て利己的の涙ではない、法を護り宗を憂ふるが故であ

る、そこで發議された其輯の内容如何といふ點に到つてお互に細かい相談には夫々又他の幹部にも協議する必要あれば相當の日子を要すること勿論である、而かも宗門に於ては最近に其等の發表をする手筈であるから、早速若干の猶豫を得たいものと翌朝老師は井村管長を雜司ヶ谷に往訪しようといふことになつた。

管長の挨拶は至極簡單で、定めた日限は變更は出來ない、統一誌は無條件で返せばよいだらうとの一言に、どうしたものかと老師は心配氣に翌日御相談があつた。

統一誌は宗門の雜誌であると、日生上人御遷化後未だ日も經ぬ初七日の晩、井村管長からお話あつた時に、自分は宗門といふよりも寧ろ統一團の機關誌といふ方、穩當でありませんかと答へた。其後雜司ヶ谷へ往訪の時に亦た其話が出た、そこで自分は明瞭に、宗門には雜誌がないから機關誌として『顯本教報』を出すといふことが創刊號にあります、それはどういふことですかとお訊ねしたが、何等お返事もなかつた。

を離れた統一團はない、統一團を外に統一誌はない、たとへありとするもそれは賈物である。統一團は統一誌以外の他の機關誌の必要は認めない、畢竟するに一切は歴史が證明する、轉々上に在り明々下に在り、日生上人の偉靈照覽在します、嗚呼此の光輝ある歴史を汚す莫れ、熱烈なる正義の團員諸氏宜しく爲法國、憂宗以て奮起せざるべからずである。

總會の必要

統一團員は本多總裁を喪ふてより甚だ淋しい境遇を見た。井村現管長には去五月一日小西左平氏同日喜師と予の三人で雜司ヶ谷本教寺に往訪し、午後一時より七時迄善後策に就て懇談せし時に、統一團のことも、自慶會のことも、知法思國會のことも總て本多土人の遺されし事業には、自分は微力ながら故に將來一切關係しない、自分としては今後十年、それも眞に働き得るには五年であると思ふ、此の五年間に三箇の仕事以上はしない、本多師は何でも新らしい仕事を始められるが結末をつけぬ、自分は三つの仕事を完成せしめたいから、それ以外には斷じて手を出さぬ、三つとは即ちこの本教寺焼失の再建が其

統一誌が過去二十年殆んど 日生上人の獨力御經營であつた事は其道にある者の否定出來ない事實である。宗門の雜誌なれば日生上人が管長をお辭任遊ばして後も補助金を半減するとか、全部撤廢するやうな事は出來ない道理である。併しかやうの事は今更申したくない、唯將來に於て本誌を若し無條件に宗門の手に委ねた時に、顯本教報に載せられた「山吹の花」や「從來の教化法は誤つて居る」とか「反宗教問題降參」のやうな 日生上人の持論に聊かでも攻撃反對の態度に出られることあらば、其時に噲臍の嘆を發しても最早用には立たぬ。之を惟ふ時に無條件にハイ左様然らば……とは申されぬでないか、如何に井村管長が、今に經濟上行詰るぞと嘲笑されても、侮蔑の一瞥を與へられても、恩師のお顔に泥は塗りたくない！

井村管長は統一團と統一團とは不離の關係のやうに公言されては居るが、統一團の出來たのは明治二十九年末に始まり統一團の出來たのは明治四十五年であつた。然るに統一誌は結團の當初から團報として發兌されて、これこそ不離の關係にある。統一誌

一、次に宗門に基本財産を造るべき一團貯金の獎勵が其二、それから第三には自分としての教義信條を整束すべく勉強する、この三つは一つでも大した事業であるから、而も三つ共に完成するには到底他に手出しは出來ないと、見事に師匠の遺業を謝絶された。越えて翌月二十日梶木、高木の兩氏が統一團を退去されたに就て、統一團の從來の事務は一切放棄さるゝ形となつた、これは實に遺憾な事と思つて早速統一團員の事や統一誌の件に就て指圖を請ふべく照會した處、井村管長の御返事は左記の通りであつた。

種々御配慮謝候御照會ノ統一團ノ義ニ就テハ目下自分トシテハ何レトモ御指圖申上兼候義ニ有之統一團方從來本多上人己人ノ事業ノ(二字不明)形ニ相成居候事故直ニ自分等方此團體ニ對シ彼此容喙致ス事ハ不可能ニ有之候  
これには自分はがつかりした、面談の時といひ、今又この御書面と申し取付くべき島もない。併し靜かに考へると統一團が日生上人の己人の事業にして宗門とは無關係であるとの井村管長の御見解は今に始まつた事ではない、日生上人御在世時代にも宗門の僧

侶が一人も統一團の講演には、頼みに往ても謝絶されて近寄らぬ事實から見ても成る程と首肯される。兎に角吾等は早速適當な方策を講ぜねばならぬ、幸にも本團には數十の立派な役員も居られるから、此人達と相談するに限ると幹部會を開催すれば、イヤどうも自分等の任期は既に滿了であるとの口實を以て通避せられる、從來は統一團代表でよく顔出しされた岩野少將さへも去る八月十三日の御手紙には小生は顯本に關係なき、また統一團にも關係なき餘の方法にて法の爲めに盡し、本多師に報恩する覺悟に候間統一團より退却致すべく候と、統一團は遂に見放されてしまつた。

併し熱心なる幹部の内より十五名の常務委員が擧げられ漸く舊態を維持することになつた。尤もかくなる事は日生上人の協賛會創設當時既に仰せられて居たことで、其豫言の適中に悲しむ者であるが、さていつ迄も嘆ては居られない、同志は相協力して恩師の遺業を全ふせねばならぬ、御生前中は親近せるも最早御遷化になれば前言を食むといふことは、少しでも信仰する者のあるまじき行爲で、滅後こそ一層

全力を盡して其の御恩召を實現せしめねばなるまいと、茲に本團は總會開催の必要を感じて先月十五日久し振りに一堂に相會し、百十四名出席の上滿場一致で左の決議をした。

決議

- 一、聖祖六百五十遠忌ニ相當セル本年ハ彌々護法宣揚ノ急務ナルヲ惟フ、然ルニ悲哉曩ニ本團總裁本多日生上人ヲ喪ヒ今ヤ當ニ半歳、血涙未ダ涸カズ、吾等ハ之ニ鑑ミ上人ノ一周忌乃至統一團ノ財團組織完了ニ到ル迄茲ニ特選サレタル常務委員ニ倚リ本團ハ現状ノマ、異體同心以テ本多總裁ノ遺業完成ニ精進センコトヲ期ス
- 二、本多總裁ノ唯一ノ遺命タル統一團協賛會ニヨリ財團法人統一團ノ設立促進運動ニ全團員ハ一致協力シ其目的完成ニ努力センコトヲ誓フ

然るに其後二十日に至り井村管長は従前の態度豹變し、吾等の特に除外し、密かに擁護者會なるものを催し自ら統一團總裁を宣言されたるは其人格に對し寧ろ奇異に感ずる。吾人は新規の事をなす場合には

先づ宗門の棟梁として第一に管長を訪ね其意見を述べたりしが、井村管長は其會見の際に於ける口述と其後に於ける言行とは表裏甚しく、實例二三に止まらず。曩には統一團は本多上人己人の事業と突放ち、統一團は盛泰寺なりと主張し、或は統一誌は本多師個人の雜誌なりと蔑視し、同師會は反宗團と言ひつゝ、今は統一團は宗門のもの、統一誌も宗門の雜誌で統一團も宗門の金で建てたと申されるが、夫等に關して詳細に論及するは貴重なる本誌を潰す恐れあれば一切は賢明なる讀者の御洞察に任かせて、破和合、妄語、綺語、兩舌、反師匠等の急所は秘めて徐ろに時機の圓熟を待つものである、釋尊は「我敢て世と諍はず、世間はわれに諍ふ」と仰せられた。偉なる哉能忍、聖中の聖尊、照々として我等を光被し給ふ。

南無妙法蓮華經

統一團法人組織

寄附者芳名

(自八月十七日 至九月十六日)

三十有餘年の光輝ある歴史を有せる統一團は、將來益々其使命たる宗教的教化と、國民思想正導の重任荷負に鑑み、先づ各自の道念を策勵し、一層同志の結束を堅くし、本團の活動に新生面を開拓せしむべく、曩に聖應院日生上人御劃策の統一團協賛會を普く天下に發表せし以來、四方の御賛同御聲援日に加はり、殊に刻下反宗問題等勃發以來、一層本會の必要と日生上人の炯眼に心伏せる次第に御座候、然るに目下財界不況にも屈せず、又各種の障害をも風前の塵と一蹴し、私共一路其創立者日生上人の遺命に隨ひ、財團法人統一團の實現を期すべく、微力を捧げ居申候、幸に、日生上人に親昵し、教恩に感謝さるゝ僧俗は此際同舟の思をなし、何卒最大の御喜捨をば爲法爲國爲佛爲恩師、伏て御願申上候

尙未だ御申込なき方は可成早く御申込み且つ御送金下さる様偏に奉願上候

- 一金貳百圓也 横濱 中村 清 一殿
- 一金壹百貳拾圓也 千葉縣 田中 道 爾殿
- 一金壹百貳拾圓也 東京 永井 省 三殿
- 一金壹百貳拾圓也 全宮 原 や 三殿



入金合計金壹千九百四拾參圓也  
外に法華經拾部箱入 大 阪 瀨 口 久 吉 殿

誌料領收 自昭和六年八月二十一日  
至全 年九月二十日

旭川	三谷完市殿
東京府	鈴木敦友殿
札幌	本澤隆正殿
北海道	木原文輝殿
京都府	有田安道殿
神戶	熊井本光殿
久留米	平岡越郎殿
山口	中田増太郎殿
千葉県	安澤文次殿
四日市	兒玉小治真殿
東京	本郷常次郎殿
全	白井勢平殿
岡山縣	橋原茂治殿
門司	津田信子殿
宮城縣	澤はじめ殿
東京	安江清海殿
全	平松市藏殿
全	今井龜吉殿

一金壹百圓也	全	内海	額二殿
一金六拾圓也	全	野島	連平殿
一金六拾圓也	全	小川	吉助殿
一金壹百圓也(即納)	全	若林	よね殿
一金五百圓也	全	無名	氏殿
一金五百圓也	大	友廣	忠正殿
一金參百圓也	全	岡島	伊八殿
一金五拾圓也(即納)	全	瀬口	寅造殿
一金壹百圓也(即納)	東	難波	芳松殿
一金貳拾圓也(即納)	全	小峰	豊殿
一金參拾圓也	全	榎本	正殿
一金五拾圓也	名古屋	大八木	義雄殿
一金六拾圓也(第一回分入金)	全	大曾根	工場殿
一金拾圓也(即納)	全	相澤	正也殿
一金參拾圓也	東	増山	幸三郎殿
一金參拾圓也	全	石川	景藏殿
一金拾圓也(即納)	全	高橋	信殿
一金六圓也(即納)	全	川西	金市殿
一金貳百圓也(即納)	全	伊東	竹三郎殿

申込總計金壹萬八千六百拾壹圓也

一金貳圓貳拾錢也	同	山	三田	常次郎殿
一金貳圓貳拾錢也	大	阪	上田	豊二殿
一金貳圓也	兵庫縣	吉岡	正太郎殿	
一金四拾壹錢也	東	京	松本	操殿
一金五圓七拾錢也	四日市	田久保	本誓殿	
一金壹圓貳拾錢也	東	京	秋本	吉次殿
一金壹圓也	青	森	柏木	吾市殿
一金參圓也	東	京	東端	兼吉殿
一金壹圓貳拾錢也	山形縣	村田	義本殿	

右難有入帳仕候也

「統一」會計

御注意

- 一、團費、誌料は總て前金に願ひます
- 一、「前金切」御注意致し二ヶ月に及ぶも御拂込なき場合は乍遺憾御送本見合せます
- 一、集金郵便は參圓以上にて其取立には團費誌料の上に金拾錢の集金料を添加致します
- 一、御轉居の節は必ず新舊双方を御明記御通知下さい
- 一、御照會には必ず返信料を添付して下さい

# 豫 告

宗祖御遠忌第二回報恩大講演會を左記の通り開催致しますから奮つて御來聽下さい

一日時 十月九日 自午後六時 至九時

一場所 神田一ツ橋通り 中央佛教會館  
(市電神保町、省線水道橋下車)

一講師 自界叛逆難 陸軍中將 四王天延孝氏  
及 他國侵逼難  
演題 文學士 小西 日喜氏  
本會理事 其他數名

主催 統一團協賛會

## 日曜講演

毎月第一、第三日曜日 自午後六時 至九時

淺草區新福井町三 報恩閣に於て、法要、講演、及び座談會を催します。信仰増進の佳節、何卒御誘ひ合せて御參詣下さい。

同 師 會

# 絶好の機会!

大僧正故本多親下最近の名著四種左の通り特價提供す  
吉凶共に此等の贈答は自他の法益極めて甚大ならん  
部數に限りあれば品切れとならぬ間に即時御申込あれ

- 一 法華經要義  
定價 金 參 圓  
送料 十 四 錢
- 一 日蓮主義心髓  
定價 金壹圓八拾錢  
送料 十 錢
- 一 日蓮主義精要  
定價 金參圓五拾錢  
送料 十 六 錢
- 一 日蓮主義本領  
定價 金貳圓五拾錢  
送料 十 二 錢

今月中に限り一部賣は二割引 送料は實費を申受く

議部滿事謹輯

一本多日生上人 實費頒布

申込所 「教」 發行所

東京市外南品川町妙國寺内

電話東京一〇九四〇番

價定一統		
一冊	半冊	一冊
金貳拾錢	金壹圓貳拾錢	金貳圓貳拾錢
送料共	送料共	送料共
五厘	五厘	五厘

料告廣一統		
表紙一頁	一頁	一頁
金貳拾錢	金拾五錢	金九圓
圓	圓	圓
前	金	之
事	之	事

昭和六年九月廿四日印刷納本 (第四百三十九號)  
昭和六年十月一日發行

不許複製

編輯兼 發行所 神奈川縣横浜市磯子區磯子町廣地一四八  
印刷所 磯部滿事  
東京府荏原郡品川町南品川百八十一番地  
電話高輪六〇二四番

發行所 統一發行所

編輯事務ハ發行所ニテ取扱フ

電話東京五一〇七一番

## 目次

- 統一團の主義(其二)……………故本多日生
- 自界叛逆難……………井上清純
- 日生上人を憶ふ(其四)……………
- 聖訓摘要……………聖應院日生上人
- 野口日主上人追憶……………寺尾與三
- 記 事
- 報道數件
- 統一團法人組織と寄附者芳名
- 誌料領收

第三十六年十一月號

# 統

# 一